

茶トラの シマちゃん

高野敦志



目次

茶トラのシマちゃん
あとがき

茶トラのシマちゃん

ぼくは茶トラの「シマちゃん」。シマシマのネコだから「シマちゃん」なんだってさ。どうして生まれたのか知らない。気がついたら、母ちゃんと兄ちゃん、妹と四匹でくらしていたんだ。

兄ちゃんと妹は白と茶のまだらなのに、ぼくだけ茶トラだなんておかしいなあ。母ちゃんはきれいな三毛ネコだし、ぼくだけ父ちゃんがちがうのかな。

庭のすみで生まれて、人間のうちの下でくらしていた。おっぱい飲んでたんだけど、しばらくしたら、そのうちのおばさんが、ごはんを出してくれた。



「こんなうまい物があったんだ！」



母ちゃんとぼくたち

母ちゃんはノラネコだったから、人間はこわいものだって、いつも言っていた。かわいがってるふりしてつかまえて、三味線しゃみせんって楽器にしちゃうんだってさ。だから、ごはんを食べるときは、いつでも逃げられるように、人間が見えなくなってから食べなきゃいけないだって。

兄ちゃんががまんできなくて、食べはじめようとしたら、母ちゃんが怒って耳を引っぱった。

「三味線、三味線ってうるさいなあ」

だけど、それがどんな楽器なのか、母ちゃんも知らないらしい。

「そんなの迷信めいしんだよ」って兄ちゃんが言い返すと、「三味線になったら、もうごはんは食べられないのよ」だって。食いしん坊の兄ちゃんは、「それは困るよ」とおとなしくなった。でも、三味線にさ

れてもおなかで歌がうたえたら楽しいのかな。

ある日、黒白のおじさんが、ぼくたちがくらす庭にやってきた。こんなとき、父ちゃんが守ってくれるはずなのに、うちには父ちゃんがいない。どこに行ったのかな。母ちゃんと子どもだけのうちには、これだから困るんだよ。

しかし、よく考えてみると、兄ちゃんと妹の父ちゃんは、ぼくの父ちゃんとちがうんだから、父ちゃんが二匹になったら、母ちゃんも困っちゃうのかな。

黒白のおじさんは、梅の木の前まで来ると、あいさつもなしに、ぼくたち家族をながめ回した。

「何だ。子連れのメスカ」



おじさんがやってきた。



「ぼくたち、どうなるんだろ」

「ここは私たちの庭なのよ」

「私たち？ そんなこと、オレの知ったことじゃねえよ」

ぼくはびっくりした。ネコの世界にも、こわいおじさんがいたんだな。その日から、ぼくたち家族に加えて、黒白のおじさんまで一緒にくらすようになった。

そのうち、ぼくはおかしなことに気がついた。母ちゃんがおじさんと仲良くなって、妹の毛づくろいもしなくなっただことだ。あんなにかわいがっていたのに。兄ちゃんに聞いたら、「おじさんが新しい父ちゃんになった」という答え。母ちゃんは子どもを三匹かかえて、きつと心細かったんだな。

ところが、この父ちゃん、食べる量がすごいんだ。自分のものを食べてしまうと、ぼくと妹の分までねらっている。母ちゃんも目の

色変えて食べてるじゃないか！ そのうち、母ちゃんのおなかが大
きくなっていった。二匹で一緒に、ぼくたちの分まで横取りするよ
うになった。兄ちゃんだけは容器にくらいついて、かみつかれても
放そうとしなかったけれど。

「母ちゃん、おなかすいたよう」

「わたしには子どもなんかいませんよ」

ぼくは耳を疑った。頭がどうかしちゃったの？ しまいには、お
じさんと一緒に、ぼくたち兄弟を追い出しにかかった。妹も泣きじ
やくりながら、うしろからついてきた。世の中にはこんなネコでな
しの母親もいたんだな。

夏の盛りに、三匹の兄弟は行くあてもなくさまよい歩いた。ある

ときは犬に追いかけられ、あるときは子どもにしっぽをつかまれ。

ごはんも食べられず、道ばたの草を食べて、吐いてしまうこともあ
った。雷かみなりにおびえて車の下でふるえてることも。

気がつくと、妹ははぐれていなくなっていた。死んでしまったの
か、親切なだれかに助けてもらったのか。ぼくは必死になって、兄
ちゃんのことについていった。

そこはぼくたちが生まれた庭だった。黒白のおじさんも、ネコで
なしの母親もいなかった。迎えてくれたのは、そのうちのおばさん
だった。どこに行ったかわからなかったぼくたちを、ほんとの子ど
もみたいに心配してくれていた。

「もう安心してね。あなたたちを追い出したネコは、わたしが追っ
払ってやったから」



「やっと戻ってこられたね」

やさしそうだけど、この人強いんだなあと思った。すぐうしろには、人間のおじさんが立っていた。もう若くないんだろう。頭にあまり毛が生えていない。一緒に住んでるんだから、夫婦なんだろうと思った。

「あつ、お兄ちゃん。エサを持ってきて！」

何だかえらそうな言い方をしている。それにしても、あの年でお兄ちゃんはないもんだ。

「あの二人、結婚してないんだよ。きょうだい兄妹なのかな。年取るまでどうしてたんだろう」

兄ちゃんは出てきたごはんを、口の中でもぐもぐさせている。おなかすいてたのを思い出して、ぼくもごはんを食べはじめたら、家の前に白い車が止まった。中からつえをついたおばあさんが出てき

た。

「あつ、お母さん、お帰りなさい！」

どうやら昼間はどこかに行っていて、夕方になると戻ってくるらしい。頭の毛は真つ白だし、頭の中のしわが顔の外にまで出ている。相当の年にちがいがいなかった。ネコだったら、とつくに「まねきネコ」になって、お店にかざられてるはずだ。

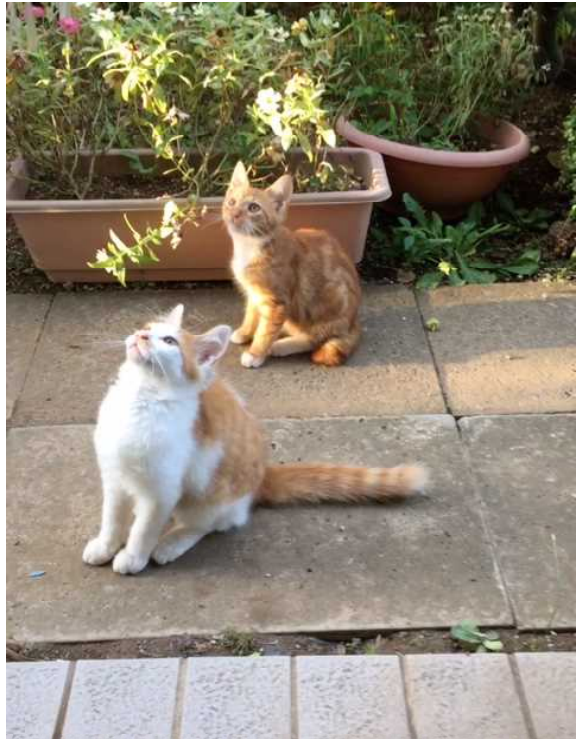
結婚してない兄妹と、つえをついたおばあさん、これがぼくたち兄弟がくらす家の人たちだった。なれなれしい兄ちゃんは、もうおばさんのひざに乗っている。この人、子どもがいないから、赤ちゃんの代わりにでもしたいんだらう。ぼくはこわいから、少しはなれたところで、ちょこんとおすわりしていた。

毛の少ないおじさんは、ぼくの前にしやがむと、頭をなでようと

手を出してきた。ぼくの毛がほしいのかな。何されるかわからないから、シャーシャーとおどしの声をあげた。まだ早すぎるんだよ。何ごとにも順序ってものがあるでしょ。

ぼくたち兄弟は、朝と夕方はごはんを食べに戻ってきた。そのほかの時は、兄ちゃんと一緒に、うちのまわりを見てまわった。何でもそんなことするのか聞いたら、パトロールなんだそうだ。黒白のおじさんとか、変なやつがやって来たら、ぼくたち二匹で追っ払うんだってさ。

草むらの間をくぐって丘にのぼり、車がたくさん止まってる間を抜けると、大きな建物の方から音楽が流れてきた。人間の子どもたちが、おとなの笛に合わせて、行進させられていた。



「丘の方から何か聞こえるぞ」

「何やってるのかな」
「あれは学校っていうんだよ。人間は学校に行かないと、おとなになれないんだよ」

兄ちゃんの話聞いて、ぼくはネコに生まれてよかったと、しみじみ思った。好きなときに起きて、ねむくなったら寝られるネコの方が、よっぽどしあわせなんじゃないか。

日暮れ近くなると、おじさんが自転車で帰ってくる。それは夕ごはんの合図だった。ぼくはうれしくなって、道のわきのみぞを走ると、庭に通じるひみつのトンネルを通って、梅の木の前に出てきた。自分よりも早く着いたぼくを見て、おじさんは目を丸くした。

「ごはんをもらったら、ぼくは兄ちゃんと追いかっこする。へい、へいの上にとまってるスズメをつかまえようとしたら、逃げられちゃっ



「おまえも登ってこいよ」

た。羽が生えてるなんてずるいな。くやしくなって、柿の木のみに、
で爪とぎをした。

兄ちゃんはやじのぼって、赤く色づいた柿の実をつかまえて食べ
ている。食いしん坊だから、何でも食べてみないと気がすまないら
しい。

「うまいぞ。おまえも食べてみるよ」

柿の実ならぼくでも、つかまえられるそうだった。よじのぼって取
ろうとしたら、下に落ちちゃった。割れたのを食べたなら、ニャー何
だ、こりゃ！ しぶくて舌がしびれて、気持ちが悪くなった。そし
たら、さっき食べたごはんまで出てきてしまった。

「兄ちゃんのいじわる！」

「おかしいな。オレのはあまかったよ。おいしそうな、えらばな

かったからだよ」

さむい風が吹いてきた。柿の木もふるえて、赤くなった葉を落としていく。おばさんは二匹の兄弟のために、玄関の前に箱を二つ置いてくれた。これがぼくたちのうちなんだって。中に入って寝ている間に、どこかにつれていかれそうだな。

夕食の時間かと思ったら、兄ちゃんがいなくなった。どこに行っただかわからない。ぼくだけになってしまったのかな。心配でニャーニャー鳴いていたら、柿の木の前のドアが開いて兄ちゃんが出てきた。

「すごいぞ、人間のうちの中は。ストーブとかいう火の箱があって、その前は春みたいにあたたかいんだ」



「早く開けてくれないかなあ」



「おうちの中でも遊ぼうね」

それを聞いて、ぼくも見に行きたくなった。でも、前のドアはいつ開くのかわからない。そこで兄ちゃんとぼくは、柿の木の上のぼろと、うちの屋根にとび移ったり、柿の木に戻ったりした。

「開ける、開ける、早く中に入れてくれ！」

ドアが開くと、兄ちゃんはすたすた入っていった。ぼくはこわいから、おそろおそろ入っていく。

「シマちゃん、おなかすいたでしょ」

おばさんがストーブの前に、ごはんを出してくれた。兄ちゃんも食べたが、「あなたはもう食べたでしょ」と言われてもらえなかった。

テーブルの前には、つえをついてたおばあさんが座っていた。あれ？ このおばあさん、ぼくたちの方を、こわい目で見ている。あ

「何、このネコ。捨ててきてちょうだい！」

「うちで生まれたのよ」

「生まれた？ わたし、ネコなんか産んじやいないわよ」

何だか言うことがおかしいと思っただら、おじさんとおばさんが、変な替え歌をうたいだした。

「ネコ産んじやった、ネコ産んじやった、ネコ産んじやったたら、
飼っちゃった。」

あとでわかったんだけど、このおじさん、丘の上にある学校の先生なんだって。こんな人に教わって、子どもたちだいじょうぶなかな。

ぼくたちはそれから、人間のうちでくらすようになった。あたた

かい部屋の中には、いつでも飲める水と、二匹のためのトイレもあった。爪をとぐためのダンボールも置かれていた。

台所にはペットボトルのふたが、たくさん洗ってあった。兄ちゃんは上へのぼると、ふたの一つを下に落とした。

「さあ、これで一緒にあそぼう！」

兄ちゃんは前足で、ひよいひよいと蹴っけていく。ぼくもやってみたくて足を出した。ふたは生き物みたいに、スイスイ床をすべっていく。こりゃ、たまらない。夢中になってやっていると、おじさんが「ネコサッカーだ」と、さけび声をあげた。

サッカーに飽きると、兄ちゃんが毛づくろいしてくれた。犬とち



「おい、おまえ、やるか！」

がって、ネコの体がきれいなのは、毛の手入れをするからなんだ。今度はぼくが兄ちゃんの毛づくろいをする。ペロペロなめていると、兄ちゃんは「うるさいなあ」と言い出した。兄ちゃんのこと、好きだけなのに。しまいには、怒ってうなり声をあげた。

「おい、おまえ、やるか！」

兄ちゃんはしつぽをムチみたいに床にたたきつけて、ぼくを怒らせようとする。ぼくがにらみつけると、兄ちゃんはぼくの頭をポカリとたたいた。もうがまんできない。ぼくは兄ちゃんにとびかかった。兄ちゃんはぼくの首をつかんで、力まかせに投げとばした。ぼくは背中から床にたたきつけられた。

「ひどいよ、ひどいー！」



「もうやだよ、この世界」

ぼくが泣き声をあげると、毛の少ないおじさんは、「背負い投げだ。すごいぞ、すごいネコ柔道」とはしゃいでいた。じゅうじどう

あたかい部屋で、ぬくぬくくらすうちに、窓の外に見える梅の木は、白い花を咲かせていた。その上に雪が積もったと思ったら、枝から緑の葉が姿を見せた。

出窓から庭の方を見ていると、ネコの声が聞こえた。だれだろうと思っただけ見ると、何と生き別れになってた妹が、こちらを見上げてるじゃないか。兄ちゃんに知らせてあげたが、「妹なんかいたかな」と言っただけ、ソファの上でねむってしまった。



「もうすぐ春になるね」

ぼくが鳴き声をあげると、妹の方でも返事をした。間違いない！これは何としても、外に出なければと思った。おばさんに妹が来ていることを知らせよう。玄関におりてしきりに鳴くと、妹もこちらに回ってきて鳴いている。おばさんは「生きてたのね！」とさけぶと、ドアのすきまから妹の方をのぞこうとした。

「今だ！」

ぼくはおばさんの足もとをすり抜けて、さっと外に出た。風はまだ冷たかったけれど、久しぶりに庭に出られたので、うれしくてたまらない。せまいうちの中で、おじさんやおばさん、おばあさんの機嫌きげんを取ったり、兄ちゃんと同じあそびをしているのもいやになっ



「ねえ、お兄ちゃん」

ふり返ると、おばさんとおじさんが言い合いをしている。寄ってきた妹と鼻を突き合わせた。たしかに、これはぼくの妹だ。どこでどうしていたんだと聞くと、この町にはごはんを出してくれるうちが多いので、順番にめぐっていけば、食べることは困らないということだ。

「それよりも、お兄ちゃんたち、あんな中に閉じこめられて、よく平気だったわね」

妹の成長ぶりにはおどろいた。体の大きさは倍以上になったし、白と茶の毛並みもつやがある。もうすぐ春だし、ごほんの時だけ、ここに戻ってくればいいのか。妹のあとを追って、へいの上を歩き、かつて出入りしていたみぞを抜けて、庭の外に出ていった。丘の上

にのぼると、パトロールしたときに見た人間の学校も見えた。

日が西にかたむくと、うすらさむくなってきた。妹についてなりのうちに行ったが、ぼくのごはんは出てこなかった。しかたがないので、うちの庭に戻ってきたら、おじさんがおいしそうな魚を見せびらかした。鼻を鳴らして近づこうとしたら、うしろから手が近づいてくるのを感じた。

「あぶない！」

妹の声でふり返ると、おばさんがぼくの体をつかもうとしていた。

「お兄ちゃん、こっちよ」



「あの虫、食べられるかな」

大急ぎで道の方に出ていった。どうやら、ぼくを腹ペこにして、うちの中に戻そうとしているみたいだった。日が暮れると、妹は近所の玄關に入っていた。何だ、あいつと思った。ぼくは一晩中、庭のすみでふるえていた。

次の日の朝も、ごはんが食べられなかった。どうしよう、戻ろうかとも思ったが、つかまえられるのはこわい。屋根の上へのぼると、日がよく当たっていた。気持ちがよくてうたた寝していると、おじさんとおばさんが、大きな鉄のごごを運んできた。屋根のふちからのぞいていると、かごの奥の棒に鶏のからあげを突きさした。

おなかが減っていたので、下にとびおけると、かごの入口から中をのぞいた。何だか勇気が出ない。まよっていると、うしろから妹

がやって来た。

「お兄ちゃん、あぶない！」

妹はかごの中に入ると、おそろおそろからあげの端をくわえて、器用にゆらしながら引き抜いた。妹が外に出てきたところで、入口の戸はガチャンと閉まった。なるほど、ぼくがかげこんで、からあげを引っぱったら、かごの中に閉じこめられるところだったわけか。

気がつく、妹はかごの前からあげを置いた。ぼくにくれるのかと思ったら、またたく間に食べてしまった。

「ごめんなさい。あげようと思ったけど、おいしそうだから……」

妹のかしこきには、頭が下がったけれど、においにはがまんがで

きなかつたんだな。ぼくのおなかはぐうと鳴った。

その日も断食かと思つたら、おばさんが玄関の前にごはんを出してくれた。また、つかまえようとしているのか。ぼくが遠くからながめていると、おばさんはうちの中に入ってしまった。うしろからおじさんが来るのかと思つたら、妹が近づいてきた。

「お兄ちゃん、よかつたわね」

ぼくはようやく、おなかいっぱい食べることができた。

次の日もごはんが出てきた。どうしたんだろうと思つた。おかげでぼくは、昼間は近所を走り回り、食事の時間だけうちに戻ってき

た。夜になると、雨が降ってきた。車の下にかくれていたが、足もとに水が流れてきた。これじゃゆっくり寝ていられない。外でくらすのって、大変だったんだな……。

夜が明けるといい天気だった。枯れていた草むらから、つくしが顔をを出していた。種がとんできたのだろうか、道ばたに菜の花も咲いている。庭に戻ってくると、どうしたわけか玄関が開けっぱなしになっていた。

ぼくは迷っていた。外のくらしはもういいかな。ほんとに疲れちゃったんだ。兄ちゃんはどうしてるんだろう。開いた玄関でふり返ると、梅の木の前に妹が立っていた。

おまえみたいに、ぼくは世渡りがうまくないんだよ。「元気でく



「反省してます」

らせよ」と言って、中に入っていくと、うしろから妹のさけぶ声がありました。

「お兄ちゃん！」

毛の少ないおじさんが出てきて、ドアは閉まってしまった。こうして、ぼくはまたうちの中でくらすことになった。部屋の中には、あたたかい火の箱がまだ置かれていた。

「おまえ、だれだっけ？」

兄ちゃんはおくんくん、ぼくのおいをかいている。おばさんがお湯でぬらしたタオルを使って、ぼくの体をふいてくれた。

「シマちゃん、心配してたのよ」

おばさんはぼくをひざの上に乘せると、ぼさぼさになった毛にブラシをかけてくれた。あまえたい気持ちになって、ぼくはおばさんの胸でふみふみをした。兄ちゃんもようやく思い出したのか、きれいになった体の毛づくろいをしてくれた。

以前と一つ変わったことといえば、おばあさんがぼくたちを認めてくれたということだ。テーブルの上に乗っていたら、「いい子ね」と言って頭をなでてくれた。

「ネコなんか産んじやいないわよ。だって、わたしはおばあちゃんだもの」

何だか言ってることがおかしいけれど、かわいがってくれるのならいいや。



おばあちゃんとぼく

「もう逃げるんじゃないよ」

おじさんは言いながら、新しく買ったらしいネコのおもちやをふり回した。だけど、使い方が下手だからおもしろくない。おばさんがひもの先についた毛を、小鳥みたいに動かしたので、兄ちゃんとおぼくは夢中になって追いかけた。

うちの中のくらしも悪くない。でも、たまには、外の空気も吸いたいな。兄ちゃんはおうちの中がいらしいけれど。いつかまた、外に逃げだそう！ 妹と一緒に、知らない世界を探険したいんだ。自由ってものがいちばん大切だからね。

あとがき

以前、『ぼくはネコなのだ』という物語を書いたことがある。自宅に住み着いた二匹の猫を題材にして、夏目漱石の『吾輩は猫である』のパロディーを書こうと思ったのである。実際にあったことにフィクションを加え、それなりに工夫したつもりだったが、パロディーを書くという意識があったせいか、ちょっと理屈っぽくなってしまった。

今回は子供が読んでも分かるように、表現はなるべく平易なものを選び、漢字の使用も制限した。読んで楽しめるものになろうと考えたのである。

この作品は前作と同じように、茶トラの弟猫が語り手であるが、童話風のタッチで描いた姉妹篇である。本当は可愛い絵も描いて、絵本にしたかったのだが、作者には絵心がなく、また、出版できる当てもないので、絵を描いてくれる画家を探すわけにもいかなかった。そこで、我が家で撮りためた写真を、物語の随所に挿入することにした。物語のために撮影したものではないため、内容と多少ずれはあるが、本文と写真を対照するのも、それはまた面白いのではないか。

二〇二二年六月六日

高野敦志